

学校運営協議会 全日制部会 議事録

校名	府立大手前高等学校
校長名	村田純子

開催日時	令和 7 年 2 月 17 日(月) 13:30 ~ 15:00
開催場所	大手前高校 校長室
出席者(委員)	会長 野口 幸一 副会長 高橋 哲也 奥村 伸二 梶間 貴志 佐藤 恒二 古久保 俊嗣
出席者(学校)	校長 村田 純子 教頭 吉田 憲司 首席 黒松 俊基 首席 森蔭 溪 研究開発部長 文田 憲行 SSH研究主任 農野 将功 記録 山井 惇平
傍聴者	
協議資料	学校経営計画、学校教育自己診断結果、課題研究に関する資料
備考	

議題等(次第順)	<ul style="list-style-type: none"> ・校長挨拶 ・学校経営計画について ・学校教育自己診断 集計結果 ・課題研究の取り組み ・SSHの取り組み
協議内容・承認事項等(意見の概要)	<p>1. 令和6年度 学校経営計画及び学校評価について</p> <p>▶令和6年度の重点目標(1)イについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ●コンクール受賞数が増加した(科学の甲子園 6位、大阪サイエンスデイ 最優秀賞)。 ●研究期間の課題(他校:2年生4月～年度末 本校:2年生後期(10月)～3年生前期(9月)) ●科学系オリンピックでも複数名が本選に出場できた。 <p>▶その他の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ●図書委員会活動:図書室前に5紙読める新聞コーナーを設置 → 新聞を読む生徒が増加している。 ●清掃ボランティア:生徒300人以上が参加し、主体的に活動を行えた。 ●海外研修:同窓会の支援により、多くの生徒が旅費を抑えて参加できた。 ●幼稚園交流:コロナ禍後に再開できた。 ●働き方改革:時間外勤務時間は過去2年間減少していたが今年度、増加していることが課題である。 <p>【質疑応答】</p> <p>(理系生徒の男女比について)</p> <p>Q:科学コンクール受賞の男女比は?</p> <p>A:大阪サイエンスデイの受賞班は女子3人、男子2人(数学分野)。</p> <p>Q:理系クラスの男女比は?</p> <p>A:およそ6:4で男子が多い。</p> <p>教員:「女子だから物理を選ばない」という雰囲気は薄れつつある。本校の気風もあり、女子生徒の理系分野での活躍が増加。</p> <p>委員:女子生徒の活躍をさらにアピールしてほしい。</p> <p>(授業アンケート結果について)</p> <p>Q:授業アンケートに関する目標と結果の差は、非常に小さい(誤差の範囲)ので△評価としなくてもよいのでは?</p> <p>A:△評価の原因は明確でないが、学年のカラーや先生との相性の影響も考えられる。</p> <p>→感想などの記述量は教員ごとに差があるものの、どの教科も前向きなコメントが多い。</p> <p>委員:本校の生徒は授業参加が積極的であり、肯定評価の微減を深刻に捉えなくてもよいのではないか。</p> <p>校長:近年、各評価は高い水準で向上傾向である。「向上」だけでなく「維持」を目標にする指標も検討する。</p> <p>委員:本校の生徒は鋭い目線を持ち、学校や教員の取り組みに対する反応も早いと思われる。</p>

2. 令和7年度 学校経営計画及び学校評価について

➤令和7年度の「めざす学校像」「中期的目標」は大きくは変更していない。

(全体について)

委員: 社会の変化(「高齢者ビジネス」「二馬力選挙」など)を踏まえ、エビデンスチェックの重要性を生徒に教えるべき。「働き方改革」という言葉を生徒がどう受け止めるかも考慮すべき。

校長: 来年度、朝のSHR廃止に向けて調整中。一旦は遅刻数の増加も想定できるが、生徒の自主性の涵養と教員の働きやすさ向上を期待している。

(国公立大学進学率の目標について)

委員: 70%の目標を65%達成としたら“○”を付けられるようになるのでは。65%でも十分高い数値である。

校長: 多くの生徒が国公立大学を志望しているため、70%目標は維持したい。

3. 学校教育自己診断 集計結果

➤集計対象: 教職員・保護者・生徒

➤教職員: 肯定的評価が増加した。(特に昨年度下がってしまっていた「各教科において指導方法についての話し合いが日常的にもたれ、普段に工夫がなされている。」が回復した。)

➤保護者: 高水準を維持している。

➤生徒: 「わかりやすい授業」「国際交流」が評価された。

(質疑応答)

Q. 質問項目「生徒が環境問題、高齢化社会等の現代的な課題について考える機会がある。」の項目は生徒は高評価であるが、教職員はそこまで高くないように思う。なぜ差があるか。

A. 生徒は公共等の授業・HR・特別活動と、様々な場面で学んでいる意識がある一方、教職員は担当教科によってはもう少しできることがあると思っている可能性がある。

委員: 「環境」についての捉え方。自然環境だけでなく、「生徒を取り巻く環境」という意味合いもあるのではないか。

高校生時代に金融リテラシーを学ぶ機会があればよかったと感じる。

生成AIの活用や「成功」とは何か考えさせたい。

委員: 1000人規模でほぼ全員が回答するようなアンケートには同調圧力の懸念があるのでは。

校長: 府立学校全体で実施しており、否定的コメントの分析が重要。

4. 課題研究の取り組み

➤LS・S探中間発表会: LSとS探の生徒(2年生)が共に発表し、主なオーディエンスは1年生であったが、3年生も見学していた。

➤80期より研究期間を2年生前期～後期に変更する。

➤SS文系の例: ハンセン病に関する研究(知識・共感・実践の観点から考察)

➤大阪サイエンスデイ最優秀賞受賞: 「素数生成多項式」

(全体について)

委員: ぜひ、発表を見学したい。

学校説明会時などにポスターを紹介してはどうか。

Q. 課題研究はカリキュラムの一環として生徒は評価されるのか。

A. 2年後期・3年前期で評価・判定。

5. SSHの取り組み

➤SS・LSコース相互見学・評価を実施。

➤異分野の研究からの刺激(文系⇄理系)。

➤高校生国際科学会議(来年度): 大手前高校が主催。他校でもここまで大規模な国際会議は少ない。

(全体について)

委員: 先生方の熱意が高まっている。中学生向けの魅力発信をお願いしたい。